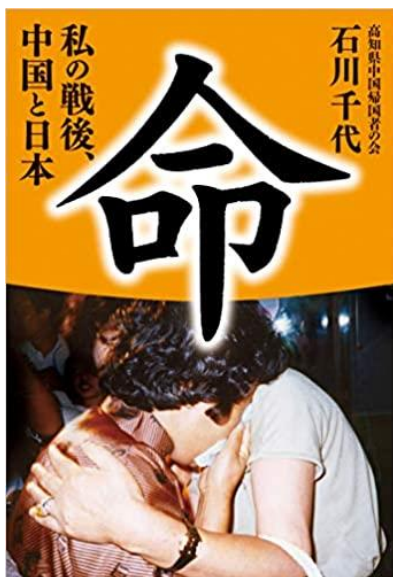


高知県出身の満州残留孤児となった石川千代さんの激動の人生

私の戦後、中国と日本 命

高知県中国帰国者の会 石川千代著 183頁 2020年 リーブル出版・高知



中国残留孤児となり高知に永住帰国した86歳になる石川さんが、私の戦後、中国と日本「命」を刊行した。やさしい文章であるが、50歳で帰国し日本語を忘れていた彼女が、このような本を執筆されたことに驚いた。

序章には小学校2年生まで高知で生活した思い出が書かれている。1942年、国策で満州に夢を託した父は家族を残して満州開拓団に2年間在住のつもりで参加した。からだの弱かった母や姉を残して、千代さんは父についてゆくと決意した。

父は終戦時、匪賊（強盗団）に襲われて死亡。独りぼっちになった千代さんは、3人の養父母家族（商人、警察官、農民）に養われた。厳しい生活ではあったが、気骨に堪えぬき学業を終わると、一人で生活したいと養父母を説得して、17歳で長春に出て事務員になった。努力が実り共産党幹部学校に推薦で入り優秀事務員となった。字がうまい書類に好奇心がわき、事務所に来る将校であったことから、御主人とロマンが実り、結婚され3人の子供と平穏な人生を歩んでいた。

しかし日本への郷愁は胸の中に残り、多くの日本永住の壁を乗り越えて家族全員で高知に永住した。

ご主人は、日本語がうまく話せず、苦労の後半生だったという。晩年は帰国中国人家族の世話をした。子供たちは、日本と中国の橋渡し、商社や会社中国駐在員の職についた。お孫さんは、高知医科大学をでて

県立病院の医師になっている。

小学校2年の学歴しかないが、高知短期大学の入学を認められ楽しい2年間の学業を終えた。この本には、おおらかな中国人の心と日本人の心が読み取れる。「満州の歴史を語り継ぐ高知の会」で、お元気で明るい千代さんにお会いして、ぜひ多くの日本人の方々に読んでほしいと思うようになった。アマゾンや通販で購入ができる。